

ブックガイド

No. 22 2020. 3. 11

■原子力問題 過去の原発事故

『チェルノブイリという経験 フクシマに何を問うのか』

尾松 亮／著 岩波書店 2018.2 369.36/冊182

2016年、チェルノブイリ原発事故から30年が経ちました。近年、関連諸国では、事故に関する政策が大きく転換され、また、この年月と経過を踏まえたうえで出された報告書には、これまでとは違ったものが報告されるようになっていきます。

これらの諸国には、「復興」や「風評被害」という言葉そのものが存在しないようで、そういった考えに基づいて、事故後の取組が行われています。チェルノブイリから30年で見えてきたものは、改めてこれで良いのか、私たちに問いかけてきます。

『フクシマの教訓 東アジアにおける原子力の行方』

ピーター・ヴァン・ネス／編著 論創社 2019.2 539.09/冊192

気候変動に対する二酸化炭素の排出削減策として、原子力エネルギーの活用を進めようとする意見や動きがあります。しかしこの本の内容が示すように、東京電力福島第一原子力発電所事故、そしてその収束までの過程を考えると、それは適切な解決方法とは言えません。原発事故の影響は本県や日本国内だけでなく、世界のエネルギー問題、環境問題にも直結しています。グローバルな視点でまとめられた今後の原子力政策への提言書です。

■福島第一原発事故

『福島「復興」に奪われる村 フォト・ルポルタージュ』(岩波ブックレット No. 994)

豊田 直巳／著 岩波書店 2019.3 369.36/冊193/

原発事故からの「復興」を目指す福島で、今起きていることを、地域の人々への取材と現地写真によって克明に伝えるフォト・ルポルタージュです。「あったことをなかったことにしてはいけない」という強い思いから、福島の実状を確認した上で、改めて「復興」という言葉の持つ意味を問い直しています。除染や帰還などの問題に対する震災避難者の苦悩がリアルに描かれる一方で、未来のために積極的な行動を起こしている人たちのことも伝えています。

『震災絵日記』

朝倉 悠三／描 福島民報社 2019.5 LS369.31/A25/1

東日本大震災・原発事故を描き続けた風刺画で、平成23年5月から今年の3月まで毎週日曜の『福島民報』に連載された410点をまとめたものです。筆者は教育者であり、県の美術界を牽引されてきた方でもあり、馬をテーマに多くの作品を描かれています。ご自身も南相馬で被災され、避難先で執筆を開始されたとあります。それだからこそ、怒りや悔しさ、いとおしさなどが胸に迫ります。この9月20日に79歳でご逝去。第二弾が見られないのはさびしい限りです。

『あの日からの或る日の絵とことば 3.11と子どもの本の作家たち』

筒井 大介／編 創元社 2019.3 J726.5/ツ/

32人の著名な絵本作家たちが、東日本大震災のあったあの日からの或る日、考えたこと、感じたことを描き、綴っています。多数の絵本を編集してきた本書の編者は、「あの日以降、出る絵本の傾向が変わったとを感じるようになった。」と書いています。独自の感性と表現による絵本作家の絵と言葉から、「みんなあの日から同じ地続きの日々を生きている。」(前書きより)ということを感じます。

『現代文学は「震災の傷」を癒やせるか 3・11の衝撃とメランコリー』

千葉 一幹／著 ミネルヴァ書房 2019.3 910.26/初193/

震災という苦難に文学者はどう向き合ったのか。多くの作家が言葉の無力さや言葉にすることの^{やま}疾しさに襲われた震災直後、物語性を拒否する「ハナシ」に近い作品が描かれました。5年ほど経過して虚構の「カタリ」である小説の形となり、鎮魂のすべとして機能しました。更には震災とは切り離された生を描き鎮魂の物語とは別の救済を示す作品も現れ始めています。文学の可能性を力強く示す、3.11後文学論です。

『飯館村に生きて 20人の足跡』

福島大学行政政策学類大黒ゼミ／聞き取り 飯館村 2018.1 LS281.9/F1/1

飯館村と福島大学は「復興連携プログラム」という協定を結んでおり、この本もその中の一環として作成されたものです。福島大学の学生36人が参加し、村民20人から自分史の聞き取りを行いました。学生たちに向けて語られる物語は、楽しい思い出ばかりでは決してありませんが、自分の孫に語りかけるような和やかな雰囲気で行われたことが想像でき、読む人を優しい気持ちにさせてくれます。

■各組織の震災対応

『SMARTCITY5.0 地方創生を加速する都市OS』

海老原 城一／著 | 中村 彰二郎／著 インプレス 2019.5 LS318.8/E2/1

東日本大震災をきっかけに、会津若松市、会津大学、アクセント等々の国内外企業による産官学の連携から始まった、会津若松市のスマートシティプロジェクト。本著は、ICTを活用して地方創生の実現を目指した取組みの数々や、そのコンセプトをまとめています。“復興”のみに留まらず、スマートシティの可能性と新しい都市の在り方を示した、最先端でチャレンジな1冊です。

■医学・健康

『あいまいな喪失と家族のレジリエンス 災害支援の新しいアプローチ』

黒川 雅代子／編著 誠信書房 2019.3 141.6/㊦193/

大切な人が行方不明になる（さよならのない別れ）、住んでいた土地や家に戻れなくなる（別れのないさよなら）などの状況を「あいまいな喪失」とし、家族やコミュニティの持つレジリエンスを高めることにより支援する方法を探ります。事例を丁寧になぞることで、悲しみとの付き合い方について多くを学ぶことができます。福島県立医科大学の瀬藤乃理子准教授が編著者の一人となっています。

『災害看護と心のケア 福島「なごみ」の挑戦』

米倉 一磨／著 岩波書店 2019.3 LS492.9/Y1/1

「相馬広域こころのケアセンターなごみ」のセンター長による、活動の記録です。南相馬市の精神科病院の看護師だった著者は、震災と原発事故により自身も被災した中、一時避難していた県外から戻り、震災直後から継続して被災者の心のケアをしてきました。前例のない状況の中で、試行錯誤しながら行ってきた相双地区の支援の拠点づくりの様子がえがかれています。これから起こりうる災害において、中長期的支援のあり方を考えるためにも貴重な記録となるのではないのでしょうか。

■復興・防災

『災害から命を守る「逃げ地図」づくり』

逃げ地図づくりプロジェクトチーム／編著 ぎょうせい 2019.11 369.3/㊦19Y

津波や水害、火災の際、どこへどう避難するのか。時間は？障害物は？外出中だったら？そんな不安を解消する、東日本大震災を教訓に考案された具体的な地図作成方法の入門書です。一読ではなかなか理解しにくいですが、必要な物の準備方法から記載されており、学校や自治会など地域全体での防災に利用され始めています。他のツールとして「逃げ地図ウェブ」も無料公開されています。

『平井信行の気象・防災情報の見方と使い方 子どもの命を守る判断力を育てるために』

平井 信行／著 第一法規 2019.9 369.3/ヒ199/

私たちの生活を脅かす自然災害は地震だけではありません。最近では台風などによる豪雨災害や水害も頻発しています。気象情報や防災情報についての正しい知識を身に着けることは、自分や周囲の大切な人の命を守ることに繋がります。本書では、具体的な事例を挙げ、気象情報や防災情報の見方や使い方を解説しています。いざというときの判断の助けとなる知識を学ぶことができます。

『復興から自立への「ものづくり」 福島のおかあさんが作ったくまのぬいぐるみはなぜパリで絶賛されたのか』

飛田 恵美子／著 小学館 2019.3 369.31/ヒ193

震災後、地元のものや文化、伝統、人材を活かした「ものづくり」のプロジェクトが次々立ち上がりました。この本はウェブサイト「東北マニファクチュール・ストーリー」が取材したプロジェクトの中から、21団体を選んで再編集したものです。プロジェクト立ち上げの経緯からものに込めた想い、苦労、やりがい、今後の目標などが描かれていますが、その姿は震災・復興時の話を伝えてくれるだけでなく、よりよい働き方やコミュニティづくりのヒントももたらしてくれます。製品のきれいでかわいらしい写真は、見ているだけでも心が和みます。

『東北の保育者たちに学び、備える 巨大地震が来る前にできること』

野津 牧／編著 ひとなる書房 2018.8 376.14/マ188

東日本大震災後、被災地へ保育科の学生や卒業生たちとボランティアに入り、子どもたちや子どもたちの命を守った保育者から学んだことを、次の震災に活かすためにと記された資料です。南海トラフ地震などこれから発生することが想定されている地震や津波から子どもの命を守るために「備えること」「対応や基準を見直すこと」「伝え続けること」の大切さを説いています。

『福島芸能の灯消さず』

菊池 和子／写真・文 遊行社 2019.2 LS385.7/K13/1

震災後に再興した浜通りの11団体の民俗芸能についてのインタビュー集です。福島県の民俗芸能研究の第一人者である懸田弘訓氏へのインタビューも掲載します。

ばらばらに住むことを余儀なくされた人たちが唄、踊り、衣装、儀式など様々なものの複合で成り立つ「民俗芸能」を伝えて残していくことの難しさについて考えさせられます。

■子ども向け

『こどものための防災教室 災害食がわかる本』

今泉 マユ子／著 理論社 2018.8 369/4

備えあれば患いなし。しかしせっかくの備えも食品類は気付けば期限が切れていた、なんてことが起こります。本書では災害の種類や今日からできる防災はもちろん、日常備蓄の方法として普段のものを多めに備え、食べた分だけ補充していく「ローリングストック」を紹介しています。食品備蓄をする際の注意点、アレルギーなどの個人に合わせた選び方のほか、アルファ化米やフリーズドライなど定番になった災害食がどんなものか、保存性と形状・包装も合わせて解説されています。

■その他

『震災地を歩く』

Showay☆／著 文芸社 2018.2 291.2/3182

甚大な被害を受けた沿岸の震災地を歩いた記録です。残念ながら福島県は含まれていませんが、2012年から2年半掛けて、正味26日間で震災地松島から八戸までの880km余を、実際に走破しています。実際に歩いたルートとかかった時間、歩数が分かるようになっています。沿岸の土地を訪ねてみると、東日本大震災以前にあった津波の石碑もあることが分かります。それは、地震があったら津波に注意するという教訓を現在にも伝えてくれます。

『おおくま・おらほのカルタ』

おおくま・おらほのカルタ実行委員会／[編] おおくま・おらほのカルタ実行委員会 [2019] LS291.9/05/1

震災後全町避難となった大熊町の事柄を取り上げた郷土かるたです。読み札には、「ふりがな」やわかりやすい説明が付いていて、子供や大熊町初心者にとってもやさしい作りとなっています。NTTドコモが全面的にバックアップして完成しました。当館では、ほかにもカルタを所蔵していますので、ぜひご覧ください。

『歴史を未来につなぐ 「3・11からの歴史学」の射程』

歴史学研究会／[編] 東京大学出版会 2019.5 369.31/4195

転勤による地域とのつながりの持続性が保たれないことや人文社会系の不要論など、近年歴史学の存続が危ぶまれています。そういった歴史学の視点から「3.11」を考察する1冊です。単なる昔話ではなく、現在そして未来へとつなげていくために必要なことが述べられています。

雑誌『歴史学研究』での連載がもとになっています。こちらも当館に所蔵していますので、ぜひ併せてご利用ください。

『復興と民話 ことばでつなぐ心』

石井 正己／編 | やまもと民話の会／編 三弥井書店 2019.3 388.12/17 193

やまもと民話の会という宮城県山元町の民話を語る方々と、東京学芸大学教授の石井正己氏が開催した、シンポジウム・朗読・フォーラムなどの記録集です。実際の民話を語るだけでなく、東日本大震災の経験が語られています。震災から時間が経って復興も進み、報道されることも少なくなった中で、震災の経験を語り継いでいくことの意味や、民話の持つ力、民話が復興を支えることについて述べられています。

『想いを受け継ぐ時代の萌芽 2018-2019 岩手・宮城・福島産業復興事例 30』

【復興庁企業連携推進室／編】 復興庁 2019.2 LS602/F24/2-2018

震災以降、新しい発想で地域経済の活性化や発展に貢献してきた岩手・宮城・福島3県の企業・団体を紹介した産業復興事例集。県内企業では野菜苗生産最大手企業の進出により川俣町に設立された「ベルグ福島株式会社」や只見町の米農家が米焼酎の製造・販売を目的として設立した「合同会社ねっか」などの最新事例を紹介しています。震災にも負けず新しい価値観のもと、元気に活躍する企業・団体を県民みんなで応援したくなるような内容です。

『その後の福島 原発事故後を生きる人々』

吉田 千亜／著 人文書院 2018.9 LS369.31/Y17/1

原子力発電所事故から数年が経過し、出されていた避難指示も徐々に解かれていく中で、必ずしも喜びだけがあふれているわけではありません。避難を続ける人もいます。除染の現実、賠償の実態、借り上げ住宅の打ち切り等々、抱える不安とそれを語れない人もいます。著者は、福島が変容していく姿を、そうした被災者の心に耳を傾けることで伝えます。渾身のルポルタージュです。

『検証 東日本大震災の流言・デマ』（光文社新書）

荻上 チキ／著 光文社 2011.5 LS361.5/01/1

東日本大震災直後は「被災地は治安が悪く無法地帯」「数時間後にさらに大きな地震が来る」など、感情を煽るデマが多く流れました。その後も熊本地震で「ライオンが逃げた」、北海道胆振地震で「科学実験の影響で大地震が発生した」等のデマが流され、多くの人が影響を受けました。

本書は東日本大震災で流れたデマの特徴を分析し、災害直後の情報が真実かデマかを見極める検証の大切さを解説しています。災害毎に必ずデマは流れるものですが、いざ災害が発生した際に落ち着いた行動をとれるよう、本書を通読してみたいかがでしょうか。